

RUBeC 演習を終えて

林 洸 弥

Koya HAYASHI

機械システム工学専攻修士課程 1年

1. はじめに

私は2016年8月13日から29日の期間、龍谷大学の留学プログラムの一つである RUBeC 演習に参加し、アメリカ合衆国カリフォルニア州のバークレー市にある Jodo Shinsyu Center で英語のライティングとプレゼンテーションについて学習してきました。また、同プログラムの一環として、現地の企業と龍谷大学の協定大学へ訪問しました。

2. 参加目的

この演習を履修するにあたり、いくつかの目的を持っていました。1つは、自身の研究を英語で説明することができるようになること、次に、より聴衆に伝わる効果的なプレゼンテーションの手法を学ぶこと、最後に、企業の見学や協定校との交流、ホームステイを通して海外の文化を学び、視野を広めることです。

3. 講義内容

3.1 テクニカルライティング

平日の午前中は、テクニカルライティングの講義がありました。講義の最初の10分程度はホールに集合して、英語での簡単な挨拶と日常会話を受講生同士で練習しました。知人と出会ってから別れるまでの言い回しや、初対面の人と世間話するときなどに便利なフレーズを実際に使って学びました。それが終わると、英文作成の基本の講義がありました。日本の英語の授業で教わる5文型はもちろんのこと、冠詞や接続詞の詳細な用法について教わりました。冠詞 (a, an, the) の使い分けについては非常に重要であると言われ、自身の研究の Abstract で、冠詞は赤色にし、冠詞をつける必要のない名詞には

必要なしと記入することで、徹底して冠詞を意識するようにしました。接続詞には話すときにしか使わないもの、専門的な文章では使わないほうがよいもの (FANBOYS) があると知りました。FANBOYS (for, and, nor, but, or, yet, so) と同じ意味であるが、論文などの文章でよく使われる言葉を Abstract で使用し、接続詞を使うときには、カンマやセミコロンが必要な場合とそうでない場合があることを学びました。Abstract は毎日のように修正され、それを直すことを繰り返しました。先述した冠詞や接続詞の訂正を始め、文章の加筆や削除、英語として意味が通らない部分を講師の方と話し合いながら修正しました。英語で研究を説明し、理解してもらうのはとても難しいことでしたが、それを通してより英語を理解することができました。

3.2 プレゼンテーション

午後からのプレゼンテーションの講義では、英語でのプレゼンテーションの上達を目的に、発音や効果的なスライドの作成方法を学習しました。講義では、日本人が苦手とする「L」と「R」の違いや、Word Stress (アクセント)、フレーズとフレーズの間意図的に空白の時間を作る Chunk と呼ばれる話し方について教わりました。単語内のアクセントだけでなく、聞く側の理解を容易にするため、文章の中で重要となる単語自体をはっきりと発音するなど、英語を話す際に重要となるさまざまなスキルを教わりました。また、受講生や講師の方々の前でスピーチを行うこともありました。これはスライドを使わず、話す内容も自由であり、発表者1人につき発表に対するフィードバックを行う者が1人選ばれました。良い点、悪い点を人から聞くことで、次の発表やスピーチをよりよくすることができました。最終プレゼンテーションでは、研究内容をスライド上にまとめ、それを使って約5分間で発表を行いました。それまで学んできた発音、Word Stress、Chunk に加え、フィードバックで指摘されたアイコンタクト、ジェスチャーを総動員し、自分なりの全

力を出すことができました。フィードバックでは、Word Stress とジェスチャーを特に褒められました。講義で教わった技術を使い、異なる学科の生徒や講師に理解してもらえるように英語での発表をすることができ、2週間前と比べて英語が上達していること実感しました。

4. 企業見学

THERMAL TECHNOLOGY 社に会社見学をさせていただきました。日本を含む世界中の企業と取引を行っており、アメリカで唯一の高温炉を販売している企業です。同社は社内で全ての部品を製造しており、納品前の試験を行っているため、部品製造施設や大小さまざまな実験施設を保有していました。販売するにあたり顧客とどのようなやり取りをしているか、また、社内でどのように製造、実験を行っているかについて説明していただきました。さらに、日本人がアメリカの企業で働くにあたり、チャレンジする精神が重要であることを教わりました。

5. 協定校訪問

龍谷大学の協定校であるカリフォルニア大学デービス校 (University of California, Davis) を訪問したことで、海外の大学の学習環境を知ることができました。最も印象的だったのが、キャンパス内に学生が自由に使用可能なさまざまな学習施設が存在したことです。学生用の会議室が複数存在し、アイデアを形にするための工具や3Dプリンターが完備されています。これによって、議論したアイデアをすぐに形にすることができ、学生はこれらの施設を自由に使い、商品の企画から設計までの流れを学ぶことが可能です。このような設備があるのは、学生たちに自らの将来のために学ぶという意識が浸透しているからだと考えられます。このように、アメ

リカの大学は日本と比較し、学生の主体性に任せ自由に活動を行える設備が整っており、積極的に学習に取り組める環境だと感じました。

6. ホームステイ

ステイ先には、母親と娘の2人、中国人留学生が1人住んでいました。ホームステイは初めての経験だったため、何をするにも新鮮でした。マザーは日本語が全く話せないため、家でのルールを教わるのも、帰宅する時間や次の日の予定を伝えることすら苦戦しました。しかし、住んでいるうちに耳が英語に慣れてきたのか、ある程度は聞き取れるようになり、さらに講義で学んだ言葉を使い、自分の言いたいことをマザーに伝えることが可能になりました。また、中国人留学生とコミュニケーションを頻繁に取るようにし、お互い英語を第二言語として使用するもの同士で、互いの国の話を題材に英会話の練習を行いました。他にも、別の家のホームパーティーに出席し、日本に来たことがない人、日本に来たことがある人、日本人だが現地で暮らしている人とも話す機会がありました。外国の方が日本に対して興味を持っていても、詳しくは知らないことがわかり、自分たちから情報を発信することで知ってもらうことが大切だと感じました。

7. おわりに

RUBeC 演習を通して、英語論文執筆のための英文法と英語でのプレゼンテーションスキルについて学習することができました。また、ホームステイ先での生活により、海外の文化や慣習を学習することができ、海外に対する関心が高まりました。このプログラムで得られた経験が活かせるように、これからも英語の学習を続けていきたいと思えます。